

京浜工業地帯の誕生と発展



東亜建設工業株式会社 提供



東亜建設工業株式会社 提供

▲ 安善町全景(昭和3年ごろ)

◀ 「京浜工業地帯の父」浅野総一郎

浅野らが築いた礎と
県営事業による拡張

昭和期に日本経済を支えることとなる京浜工業地帯は、明治後期から大正期にかけて、浅野総一郎を中心とした民間実業家による京浜運河の開削及び鶴見と川崎地先の埋立造成事業を契機に、その基盤が築かれました。第一次世界大戦による世界的な好況や関東大震災を契機とした工場移転の流れを背景に、この埋立造成地に続々と企業が立地し、今日の工業地帯の骨格が形成されていきました。浅野らによる埋立は昭和3（1928）年に完成しました。

昭和6（1931）年に勃発した満州事変を契機として重化学工業が発展すると、京浜工業地帯はさらに注目を集めるようになり、国（内務省）が、公営による造成を決定しました。これにより、神奈川県が、県営埋立事業として京浜臨海工業地帯造成事業を実施することとなります。

県営埋立事業は昭和12（1937）年から10か年継続事業の計画で、請負事業者として東京湾埋立株式会社（現・東亜建設工業株式会社）が指名され、一部が完成しましたが、太平洋戦争への突入に伴い、事業は中断となり、終戦後は戦災復興事業が優先されたため、昭和20（1945）年にやむなく廃止されました。



かながわ「昭和100年」

つながる心、ともに未来へ